



社会福祉法人いわき福音協会

会 報

第10号
2006. 3. 31

発行責任：いわき福音協会 ☎0246-23-1903
住 所：福島県いわき市平上平窪字羽黒40-44



「信仰と希望と愛。」

「このうちで最も大いなるものは、愛である。」

コリント人への第1の手紙第13章13節

いわき福音協会理事長 海野 洋

この度、障害福祉計画の指針が示され、その全体像が明らかになりました。あるべき福祉の姿、或いは施設の姿勢が問い直され、基本的な新体系への枠組みが出されました。

就労や地域生活への道筋が具体化され、その移行に関する機能を強めるためにも、それに沿った事業・施設体系の再編が進められてきました。

その内容は、ご承知の様に複数の事業選択へのメニューが提示され、利用者自らの意思表明に重点を置いた見直しは、自立への後押しをしながら強力に社会参加を推し進めた改革と言えます。

この改革に沿って、国は今後の福祉計画作成のために、各事業者での新しい移行希望者を把握して、その実態数を基に必要なサービス量を設定したいとしています。

私達にしても、こうした新サービス体系への移行を念頭に、各施設は急ぎ実態把握をしなければならぬと思っています。

いづれにしても、従来の施設の位置づけが変わることになり、この変化に対応するためにも、法人として様々なサービスを計画し、特に、地域生活を支える事業の取組みは避けられません。いま、そうした意向に添って一つ一つの事業を進めています。その遂行は大変厳しいものがあります。こうした実践の積み重ねが、なくてはならない不可欠な法人存在に繋がると信じています。

さて今年の標語は「信仰と希望と愛、このうちで最も大いなるものは愛である」。法人創立者大河内一郎先生は一貫して「愛」を大切にしてこられた。子供達を愛し、施設を愛し、福祉を愛してきました。しかし、このところ福祉の変化に目を奪われ、愛が身近に感じられない。そればかりか事業や組織の拡大から様々な問題も生じる。こうした時に私達は、何を見つめ何によって支えるべきか、創立者はそれは「愛」以外にないとしています。この法人理念にもあるこの思いを、改めて噛み締める一年にしたいと思います。

生誕百年



大河内医博の歩み

昨年十一月、生誕一〇〇年を迎えた大河内一郎先生は明治三十八年十一月十四日茨城県に生まれた。明治四十一年、父・友蔵が磐城中学の武道教師として赴任したのを機にいわき市(当時、平町)に移り住んだ。当初、松ヶ岡公園の下の辺りに住んでいた様だが、その後、才植小路に転居し内郷御厩町の大河内記念病院内、そして高坂町一丁目の順に居を構えた。「いわき福音協会」の住所は昭和五十年代まで才植小路四番地になっていた。

自伝的小説「露のとう」によると小学生の頃までは名打ての悪童で、当時、瀬尾薬局の西隣に聖公会の教会があり、詩人の山村暮鳥が牧師をしていた(大正四年の頃)。そこに土爆弾を投げ込んだ。後年、熱心なキリスト者になられた先生のエピソードとしては想像のつかない話である。大正八年、福島県立磐城中学に入学。中学三年の時、母方の従兄の影響でキリ

スト教信仰に入った。中学では剣道部に所属し磐城高校剣道部百年史にも大河内一郎の名が残されており、科学か宗教のジレンマに悩み神学校を三カ月で辞め日本医科大学に進んだ後も、剣道部で大活躍であったという。眼光の鋭さは案外こうした所から生まれたのかもしれない。

昭和六年、日本医科大学を卒業。東京市立大塚病院に勤務、昭和七年、東京市立警察病院整形外科に勤務、昭和八年、東京大学医学部整形外科実習研究生となり、昭和十四年、満州国ハルピン中央病院に勤務した。この時、大河内先生は「生命奉還」という言葉を書き記している。帰国後、昭和十五年、日本医科大学の研修生となり昭和十八年十二月、医学博士の学位を受けた。第二次大戦も渦中の昭和十九年五月、軍医として応召しフィリピン・ネグロス島に向かい激戦の末終戦を迎え、二年間の砂を噛む様な汚辱の俘虜生活の後に復員した。昭和

二十一年十二月三十一日付、佐世保上陸支局長名の復員証明書には部隊名/南方十二陸軍病院・軍医少尉とある。

さて、その後の歩みについては資料等の通りであるが、肢体不自由児施設の建設は、昭和二十六年一月六日に建設起工式を行い二十七年十月の完成まで実に一年九ヶ月を要している。途中、資金難のため何度か工事中止の憂き目にあいながらも、当時としては唯一の民立民営の施設が開園したのである。

たとえ苦しくとも/なんと批評されようが/誰もついて来なくとも/私はこの道を歩まねばならない/これが私の生きる道だから/私はこの道を行く。

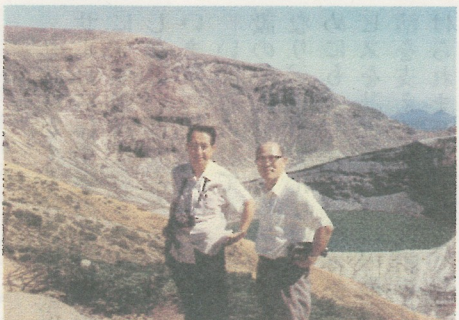
福島県肢体不自由児協会の創設、親の会連合会の結成など数多くの業績に対して高木賞を始め様々な賞を受賞されたが、大河内先生が素晴らしかったのは外見で人を判じることが無かったからだ。いと小さき貧しきものをもその可能性を信じ、一個の人間として見ていたことである。これこそ福祉の原点ではなかったか。大河内先生は正に八面六臂の人であった。

「いわきの人」 大河内一郎展

「いわきの人」大河内一郎展が、平成十七年十二月二十四日から平成十八年一月二十九日までいわき市小川町にある草野心平記念文学館において開催された。

十二月二十四日、いわき福音協会海野洋理事長、大河内真一氏等によるテープカットにより開幕し、社会福祉活動の写真などの他、短歌集「人魚」、詩集「雑木林」、小説「露のとう」なども展示され、文芸分野での活躍も紹介された。

また、平成十八年一月十五日には、同文学館の小講堂において、大河内一郎指導監督による映画「光の歌」上映会が開催され、創設期の福島整形外科護国が紹介された。



河邨文一郎博士(左) 大河内博士(右)



医学博士 大河内一郎

地域交流センター 大河内記念館竣工



地域交流センター 『大河内記念館』完成する

この度、長い間の念願であった地域交流センターが完成しました。奇しくも当法人創設者大河内一郎先生の生誕百年目の節目に当たる十一月十四日に竣工式が執り行われ、という記念すべき日となりました。これを記念して『大河内記念館』と命名されました。

ホールには大河内先生の生

前の記念すべき品々が展示され、「明日を担う子ども達のために全生涯を捧げよう」とする大河内先生の人柄を計り知ることが出来ます。また、当法人各施設の利用者の作品及び施設紹介を順番に展示し、ご理解いただくコーナーも設けてありますので、ぜひ、ご来場をお待ちしております。

大河内医博と アート



大河内先生の御宅を訪ねると広い書齋の奥に書棚が設けられてあり、そこには本が何層にも積まれてあった。書齋の先生のデスクの周囲には下の部分が引違い戸になっている戸棚があつて、そこには夥しい量の様々な資料が押し込まられていた。忙しいはずなのに不思議といずれの資料も、朱書きで見出しが記されていて見分けやすく分類がなされていた。

青年時代、宗教か科学かのジレンマに悩み大河内先生は

時代と共に福祉の流れがどう変わるうともこのセンターが利用者のみならず地域の方々の交流の場として、あるいはいろいろな会議の場として大いに利用され、地域福祉の発信源及び支援拠点として生かされていくことを切に望んでおります。つきましては、是非このセンターをご利用下さい。

医学に転向した。その時、小原国芳の「理想の学校」を読み一つの幻を与えられた。さらにペスタロッチ、フレレーベル、ルソー、エレンケー、モンテッソーリなどの教育思想界を彷徨する中、次第に先生の心は専門の医学を活かしたミッション・ホスピタルスクール創設に向かつて行ったと当時の案内書に記されている。

東北・北海道で一番最初、全国で五番目に位置する肢体不自由児施設の開設は、想像を絶する情熱と行動力がなかったら実現には至らなかつたと推測する。補助金制度も無く、無論、福祉などという言葉すら一般的でなかつた時代に、障害児の実情を訴え、福祉を啓蒙するには・・・

短歌、映画、詩、小説、記録はそうした中から生まれた。

疲れきってしまつてもう動きたくないとき
急病人を診てくれという
ああ嫌だなあと
そのときイエスの
悲しむ瞳を感じる
私は診察を始める

イエスの悲しむ瞳を感じる感性こそが、大河内先生の最も根底をなすものではなかつたかと反芻する。(岡部 明)

New Project Information

新事業紹介

New Project Information

障害者自立支援法が成立し、障害者福祉が大きく変わろうとしています。そんな中、当法人としても障害者を持った人達が自立した日常生活を送れるよう支援することを目標に事業の見直しを実施しています。

そのための最初の事業として、障害者小規模通所授産施設「ひかり」の授産種目として弁当部門を開設しました。障害があるために働く能力・意欲がありながら、一般就労の難しい人たちにできるだけ多くの働く場を提供し、働くということを通して一人一人が自信を持って生活していくことができるように支援していきたい。また、ここで得た自信を元に一般就労に結びつけることを目標とし、一人の人間として生き甲斐のもてる人生となるように支援していきたい。栄養士が作成した献立をプロの調理師が

小規模通所授産施設「ひかり」

「弁当部門」開設

(日本財団助成事業)

調理した弁当です。ぜひ多くの人に利用していただきたいと思います。

なお、この事業は、空き倉庫を厨房に改修して授産活動に利用するという事業であり、この改修事業を実施するにあたっては、日本財団の多大なご協力をいただきました。深く御礼を申し上げます。

利用者及び職員は、びかびかの厨房で調理された弁当を毎日お客様にお届けすることにやりがいを感じながら作業に励んでおります。この事業が障害者の地域生活を支えるための一助となるように進めていきたい。また、法人内の園芸部門とも連携し、利用者が育てた野菜等をこの弁当の材料とすることによって、さらに日中活動の場を広げたいと計画しております。



平成17年度苦情受付報告書

(1) 申出人と利用者の関係

社会福祉法人いわき福音協会						合計
本人	親	兄弟	子	世話人	その他	
2	0	0	0	0	0	2

(2) 苦情相談分類(受付件数)

ケアの内容	嗜好・選択	財産管理等	制度等要望	その他	合計
0	0	0	0	2	2

(3) 苦情の発生場所

施設内						合計
生活棟	作業棟	食堂	事務所	その他		
1	1	0	0	0		2

*グループホーム、生活ホームは生活棟と読み替える。

施設外						合計
職場	実習先	通勤途上	その他	行政		
0	0	0	0	0		0

(4) 申出人の要望

話を聞いて欲しい	回答が欲しい	調査して欲しい	改めて欲しい	その他	合計
0	0	0	2	0	2

(5) 申出人への確認

第三者委員への報告の要否			第三者委員の助言・立ち会いの要否		
要	否	合計	要	否	合計
1	1	2	0	2	2

(6) 想定原因

説明・情報不足	職員の態度	サービス内容	サービス量	権利侵害	その他	合計
0	2	0	0	0	0	2

* 苦情申出には至らない要望等については、委員会において検討、意見交換を実施した。

当法人の苦情解決委員会は、平成十二年度からスタートし、六年が経過します。発足当初は、「苦情を訴えられ」と身構えてきこちない対応をしてしまっていました。しかし、今は、苦情を誠実に受け止め、解決に向けて積極的に取り組むことがより良いサービス提供に繋がることと考えています。

平成十七年度第1〜3四半期での苦情件数は二件であったが、私たちは、苦情が少なく、苦情まではいかない数多くの要望に目を向け、共通点などがあれば対応する方法を

講話しなければならぬだろうと思っております。私たちが、小さなことをおろそかにすると利用者には不信感が生じ、信頼感を取り戻すには数倍の労力を費やさなければならなくなつてきます。例えば、組織の中で大切な「ホウ・レン・ソウ」をないがしろにしたために生じる要望、チェック体制の不備による要望、つい、ぞんざいになりがちな利用者への言葉遣い、応対の態度等を生じさせないための工夫と起こつてしまった時の対応、それらは、利用者が施設を利用し始める時から、職種を超えてのかか

編集後記

最近心から笑った事があつたかと思ひ返してみた。人と人とのふれあいの中で、心から「笑顔」を浮かべる事の出来る年にしたものである。

苦情解決委員会報告